Title	現代社会は画一的で自由のない鉄の檻なのか。アメリカ政治文化の今日の内的ダイナミズムを定義するのにマックス・ヴェーバーを用いる。
Author(s)	Stephen, Kalberg 森川, 剛光 / 訳
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.51, 2012.1：182-205
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4203
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

現代社会は画一的で自由のない鉄の檻なのか。アメリカ政治文化の今日の内的ダイナミズムを定義するのにマックス・ヴェーバーを用いる。

スティーヴン・コールバーグ
森川 剛光 訳

《解　説》

ここに訳出したのはスティーヴン・コールバーグ氏の論文“The Modern World as a Monolithic Iron Cage? Utilizing Max Weber to Define the Internal Dynamics of the American Political Culture Today.”(2001)である。*Max Weber Studies* 二〇〇一年一号（増補改訂前に一度一九九七年にPartisan Review 六四巻二号［1997］に掲載されたことがある）に掲載され、その後独仏伊西の各国語に翻訳され、紹介されている。また*German Politics and Society* 誌二一号に掲載された“The Influence of Political Culture Upon Cross-Cultural Misperceptions and Foreign Policy: The United States and Germany.”(2003)も訳出し、本号別稿となっている。

コールバーグ氏について紹介する必要はもうないと思うが（例えば甲南大学ヴェーバー研究会訳『マックス・ヴェーバーの比較歴史社会学』ミネルヴァ書房、一九九九年の訳者後書きを参照）、手短に略歴を述べよう。スティーヴン・コールバーグ氏はワシントン大学で歴史学のB.A.取得後、一九七〇年よりニューヨーク州立大学ストーニーブルック校で社会学を学び、一九七八年には同校でPh.Dを取得。それに先だって七三〜七八年はドイツのチュービンゲン大学で、ドイツ文化社会学の重鎮、故フリードリヒ・H・テンブルック教授に師事した。一九九二年にはボストン大学社会学部助教授、九六年より同大学准教授の職を務められている。主な研究分野は社会学理論、アメリカ社会論、比較政治文化論であり、『マックス・ヴェーバーの比較歴史社会学』出版後、現代アメリカを代表するヴェーバリアンであることは贅言を要しないだろう。ここに訳出した論文及び別稿で訳出した論文はそれぞれ教授の専門であるヴェーバー理論に基づいたアメリカ社会論、米独比較文化論となっている。

この論文は有名なマックス・ヴェーバーの「鉄の檻テーゼ」についての考察である。コールバーク氏によれば、「鉄の檻というメタファー」でヴェーバーのモデルネ観を要約することはできないという。ヴェーバーの同時代診断はこのメタファーより、ずっと分節化された複雑な態度を取っていた。第一にメタファーを使う時も、非常に限定的に用いており、第二にヴェーバーは――ニーチェ、ジンメルと違い――モデルネの成果をネガティブにのみ評価したのではなく、肯定すべき所は肯定している。第三にヴェーバーの社会学は「鉄の檻」という社会哲学ないしは、歴史哲学的なテーゼよりはずっと複雑である。そして、現代社会と過去のダイナミックな関係を確認したあと、コールバーグ氏はアメリカ政治文化の分析に向かう。カルビニズムの伝統に根ざしたアメリカ政治文化では「原理的価値のために共同体を改革――行為――するように個人に課せられたシビック的理想の高い要求により、現世支配の個人主義は永続的に活性化され」ているとい

う。「植民地時代と初期のアメリカ合衆国では誠実さ、フェアプレイ、社会的信用、善意、平等な待遇――これは一つのエートスなのであるが――というシビック的理想は公的領域に浸透し、活動的個人主義を全くの利益追求、権謀術数、自己中心主義、日常生活での無限の誘惑の中での放縦といったものから引き離しており」、経済的官僚制的合理主義の貫徹する「鉄の檻」としての公的領域とその避難所としての私的領域という二分法はアメリカ合衆国には適用できないのだと論じる。ここまでは、氏の論考は選ばれた地としてのアメリカ、道徳的なアメリカ人というアメリカ賛美にしか見えない。しかし、この古プロテスタンティズムに基づいたシビック的理想は、現代アメリカでは官僚制の「鉄の檻」ではなく、別の脅威に曝されているという。それは消費エンタメ文化であり、「現世支配的個人主義」、「消費者エンタメ産業」、「シビック的領域の理想」という三局の緊張関係が二〇世紀末から二一世紀初頭のアメリカ社会を特徴づけていると結論づけている。

なお訳者がスイス在住という事情もあり、参照文献の邦訳に全てあたることはできなかった。また引用部分は邦訳が手許にあった文献も適宜訳し直してあり、邦訳の参照ページを全て挙げることが不可能なので、スタイルの統一を考えて、邦訳ページ数は省略した。関係者の方々にはご理解とご寛恕を願いたい。

鉄の檻

マックス・ヴェーバーが現代社会を《鉄の檻》として描写したことはよく知られている。世紀末の他のほとんどのドイツ人の同僚たちとともに、彼は近代資本主義の登場を戦慄と凶兆とともに見たのであった。ヴェーバーは鉄の檻などのように定義しているのだろうか。そして、この比喩は彼の近代観（モデルネ）を正確に表現しているのだろうか。より一般的にいえば、ヴェーバーの著名な社会学上の論考は、二一世紀の端緒にいる今日のアメリカ人が、自らの社会を理解し、とりわけその《政治文化》を理解する一助になるだろうか。

彼の最も有名な論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で、マックス・ヴェーバーは、一六・一七世紀のピューリタンの《世俗内》禁欲が《職業》の観念を誕生させたと論じた。仕事へのこの方法的生活態度――《プロテスタンティズムの倫理》――はそれが一八世紀のアメリカ植民地に広まるに従い、その宗教的基礎を失った。それにもかかわらず、その相続人である資本主義の精神は高度に組織化された産業資本主義の誕生の産婆役になったのである。しかし、我々は今日この「近代的な経済秩序のコスモスの中」に生まれついており、職業観念を土台として体系的に働くような動機づけを失っている。むしろ、「このメカニズムは、機械制生産の技術的経済的諸条件と結びつき」、我々が生き残るためにはそうせざるを得ないように強制している。「圧倒的な力」が資本主義をしっかりと固定し、そして行政と市場の偶然性という《道具的理性》に基づいた強力な構造が我々の生活を決定している。「ピューリタン達

は職業人たらんと欲した。我々は今日そうたらざるを得ない」[1]。この動かしがたい《鉄の檻》は今や我々の生活を取り囲んでいる[2]。

ひとたび方法的な仕事への動機づけが複雑に絡みつくと、仕事が崇拝の対象となったとしても、価値というものはもはや決定的ではないし、あるいは「現代の工業労働」において育成されもしない。「《職業を求め、それを受け入れる義務》という観念は、もはや宗教という実体の中に固定されていない信仰の幽霊として、今や我々の生活の中を徘徊している」。更にこの《隷従の檻》でかくも大量に生産された物質的財貨は「いつでも脱ぎ捨てられる薄い外套」ではなくなってしまう。むしろそれらは「ますます増大し、最後には人々の上に逃れがたい――歴史上かってなかったほどの――力を獲得する」[3]。加えて、ヴェーバーは強調するのだが、西洋における近代資本主義の進展に平行して、特殊な組織が発達する。それは資本主義の機能にとりわけ適合し、その不可欠の価値を強調する。技術的処理能力に長けた行政組織である。

> 訓練を受けた専門的労働の特殊化、権限の分割、勤務規則及び階層的に段階づけられた服従関係をもった官僚制組織は……未来の隷従の容器を作り出す働きをしている。もしも純技術的に優れた、即ち合理的な、官僚による行政と事務処理とが、人間にとって、懸案諸問題の解決方法を決定する際の、唯一究極の価値であるとするならば、人間は、たぶんいつの日か古代エジプト国家の土民のように、力なくあの隷従に順応せざるを得なくなるだろう。なぜならば、官僚制は、他のいかなる支配構造と比べてもお話にならぬくらい確実に、ああした仕事をやるからである（Weber 1968b: 1402）[4]。

この鉄の檻のモデルにおいては、官僚制の支配は権力を独占する幹部官僚と公務員というカーストを生ぜしめる。これ

が生じた程度に、各個人は「その仕事……その階級、……そしておそらくはその職業」に束縛されるようになり、それと同様に官僚制と結びついた「身分秩序」も課せられるであろう。(Weber 1968b: 1402/332)。純粋な起業家と政治的指導者の発達の機会は「機械のように禁欲的に合理的な」この強固に階層化された社会において消え去る(Weber 1968b: 1402/333)。この官僚制幹部の「避けがたい権力」が支配するならば、「社会的無能力者の平和主義」、あらゆる社会的ダイナミズムの喪失、そして社会全体にわたる完全な停滞が結果として生じるだろう(Weber 1968b: 1402–403/333–34; 1978: 281–83/62–65を見よ)。

この鉄の檻の社会は、兄弟愛、同情、英雄的な倫理的行動の存在する余地はなく、一方ではますます非人格的で慎重な官僚制幹部の価値——義務、時間厳守、確実性、位階秩序の遵守等——によって支配されるようになっていき、他方では利害と利益の道具的な打算によって支配されていくようになっていく。未だ感情と人格に定位した価値が脈打っている親密圏という私的領域への撤退——そして私的領域の洗練——は美的感覚において適度の尊厳をもった唯一の生き残りの手段と見なされる。《温かい家庭の団らん》は避難所となる。暖かく深い絆が見出されるのはここだけである。このスケッチでシビック的美徳と公的倫理を見出すことは全くできない。そして同様に、私的領域を包含するほとんどの価値は、かつて——主に宗教的だった時代の——単なる瀕死の遺産としてのみ存在している。それらは今や、全能で無慈悲な打算、操作及び道具的理性の拡張により死滅の危機に瀕している(Weber 1930: 181–82/203–204; 1946b: 155/612; 1946a: 128/560)。

現代の無数の解釈が、この描写をヴェーバーによる我々の時代の同時代診断であるととってきた。彼は陰気で、悪夢に取り付かれたような人物として、宿命論的で絶望的ではあるが、しかしまた英雄的でストイックな人物として描かれてきた。その肩の上に二〇世紀という冷酷な重荷を運びながら血を流している巨人として。

彼の近代観(モデルネ)は多くの世紀末のアングロサクソンの社会ダーウィニズムの理論家からずっと隔たっていることは認めら

れなければならない。社会ダーウィニスト達は到来しつつある産業主義の時代を《進歩》として、文明の新しい前進として、人類の勝利に満ちた進化の更なる段階として言祝(ことほ)いだのである。ヴェーバーは、産業化された世界において開かれた参加、公的な理想、公的な倫理、市民権及び人格的自由という広く深いシビック的領域を発見したあらゆる《民主主義の理論家達》と意見を異にしている。一九五〇年代にまだ著述活動を行っていれば、彼は《近代化論者達》に鋭い不同意を示していただろう。近代化論者達は皆、資本主義それ自体が民主主義を引き起こし、民主主義は大まかに産業主義の前進と平行して進むと主張していたのである（Parsons 1966, 1971を見よ）。ヴェーバーによれば

> アメリカに存在しているような……今日の高度資本主義に《民主制》との、あるいは（語のあらゆる意味での）《自由》との選択的親和性を帰属させるなど、全く笑うべきことである。問題はむしろ資本主義の支配のもとで、いかにしたらそもそもこれら全てのことが長期間持続していくことが《可能》であるかということなのだ（Weber 1978; 282/333; trans. Altered; see 1968b; 1403）。

それにもかかわらず、鉄の檻というメタファーでヴェーバーの二〇世紀についての複雑な見解を要約することはできない。第一に鉄の檻とは、実在ないしは短期のシナリオというよりも、我々の地平に生じ得る悪夢のビジョンとしてヴェーバーは構成したのである。仮定法、限定的な表現（一七八頁の引用を見よ）と複合的な先行条件が、彼がこの語句を用いる際にはほとんど常に付着している（1968a: 960–61/554, 969–71/559–60, 991/572; 1968b: 1403–1404/333–335; Mommsen 1974b: 86–87）。

第二にマックス・ヴェーバーは主として近代(モデルネ)社会を――それが個人に付与する自由と権利及び自律的な個人というまさにその観念を特に――歓迎したし、彼の同僚の大部分のナイーブなロマン主義と過去を軽蔑した。「というのは結局

の所、《人権》の時代のこの偉大な成果なしに我々が（我々の中で最も保守的なものでさえ）そもそも生きていけると信じるのは、ひどい自己欺瞞であるからだ」（Weber 1968b: 1403）[5]。強力で競合する政党、権力の立憲的な分割、政治家の《責任倫理》、市民的自由の憲法上の保障、選挙権の拡張を支持して彼は演説と執筆に飽くことはなかった（Weber 1968b: 1462/406; 1946a: 115–27/545–59 を見よ）。民主制が可能なのは強力な議会が存在するところだけだと彼は激しく主張し、強力な議会を彼は自分が提唱する《人民投票的指導者民主制》の政治的指導者の訓練場と見なした（Weber 1968b: 1409–14/341–50; Mommsen 1974a: 44–71; 1974b: 72–94）。そして彼は官僚制の権力をチェックするために多元主義的に競合する利益集団を維持する様々なメカニズムを建設することを試みた。というのは「我々《個人主義者》と《民主的》制度の信奉者は物質的な状況という《流れに抗して》進まなければならないからである」（Weber 1978: 282; 281–282/63 を見よ）[6]。彼の同時代人、とりわけニーチェとゲオルグ・ジンメルの間でかくも有名だった宿命論と絶望というよりも、むしろ、鋭い評価が混ぜ合わさった懐疑主義が彼の立場を特徴づけている。それどころか、産業社会は、ダイナミックでありさえすれば、倫理的に導かれた個人の自律性の発達の機会を提供すると彼は信じたのである（Weber 1946a: 115–27/545–59; 1968a: 960–61/554, 979–80/565; 1207–1210/724–726; 1978: 282/64; Löwith 1970; Mommsen 1974b: 21–43, 86–87, 93–95; Kalberg 2000b を見よ）。

第三に二〇世紀を鉄の檻として見た社会理論家としてのヴェーバーの一般的な肖像は、彼の社会学的な論考よりも政治的及び社会哲学的な論考から大部分引き出されている。ヴェーバーの比較歴史社会学は、むしろずっと分節化された記述を提示している。社会学上の論考から引き出される現代産業都市社会に関する彼の態度は、鉄の檻のメタファーが示唆するよりも、よりダイナミックでより分節化されている。誤って彼の立場と思い込まれているグローバルで、不可逆的で一枚岩の発展よりも、彼の注意を捉えているのはケーススタディ、とりわけ国民国家のそれである。

よりダイナミックでより分節化された分析

ヴェーバーは《社会［複数形であることに注意］》を様々なスピードで展開する行為の競合し、互いに作用し合う領域の配列から構成され、緩やかにのみまとまったものとして理解した。それは宗教領域的、経済領域的、法的領域、支配、身分集団、そして家族の領域といったものである（Weber 1930: 75–78/60–62; 1968a; Kalberg 1994: 104, 149–51; 1998: 221–25を見よ）。この理解により、彼は、現在をどのように説明する場合にも、過去の発展がすこぶる重要であると確信していた。同様に彼が確信していたのは、習慣、慣習、法、支配関係、そして遥かな過去に生じた価値が現在に、多元的な、しかししばしば曖昧な仕方で浸透しているということである。彼は社会を《伝統的》か《近代的》か《ゲマインシャフト》か《ゲゼルシャフト》かに分ける概念化や今日の近代化と政治的発展の構造機能主義学派のような概念化を、包括的すぎると拒否した。ヴェーバーはまた、過去の行為が現在にも全く影響しているのならば、その衝撃度において残っている、長期的な重要性があると考えられるという見方を拒否した。過去というものは現在との数千年の裂け目にも生き続けうると彼は主張する。その中心的な核においてすら。《新しいもの》という唐突な外観でさえ、――カリスマ的指導者の極端な権力さえ――過去とのつながりを完全に絶っている訳ではない。「どこにおいても過去から事実上伝承されたものは、今日妥当しているものの父であった」（Weber 1968a: 29）[7]。歴史というものは追放されてしまうどころか、現在と相互交渉しているのであり、過去の影響を認めなければ、現在のユニークさを説明するいかなる試みも見込みのないままに終わってしまうほどなのである（Kalberg 1994; 158–67, 187.89; 1997を見よ）。

例えば、ヴェーバーは、一七世紀のアメリカ植民地で成立した禁欲的プロテスタンティズムが弱体化・世俗化した形

式で今日のアメリカの日常生活においても持続している様々なあり方に注意を払っている。それは資本主義の明白な支持であり、独立独歩の個人主義であり、国家（特に強力な国家）に対する不信であり、それが提供する基本的な未来とチャンスに対する指向であり、知覚された悪に対する不寛容、慈善組織への高度の援助、民間団体設立の際の素早さ、目標を決め、自分の運命を形成し、社会的に上昇する個人の能力への強い信頼である。官僚制化、都市化、近代資本主義の勃興といった巨大な構造転換にもかかわらずそのような過去からの遺産は今日も持続し、産業主義の画一化を強制する《構造的強制》に浸透しているし、絡み合っていると彼は論ずる（Weber 1930: 155–183/63–206; 1946c: 1985を見よ）。現代社会は新しい、ラディカルな過去からの断絶というよりも、むしろ過去と現在の混合物――それもダイナミックな混合物――なのである。それどころか彼の分析の流儀はそれぞれ特定の国を精密に調査することを擁護している。単一事例に焦点が当てられなければならないし、それぞれの国民のユニークさが確認されなければならない（Kalberg 1994: 81–84）。

例えばドイツとアメリカ合衆国はともに世紀末のきわめて高度な工業社会であったが、多くの重要な差異により互いに異なっていた。ドイツは強力な社会福祉国家であり、強力なエリート官僚、権力の権威主義的な集中、弱体な議会、《羊の群れのように治められる》受動的な一般市民、国家の権威を支持する国家教会（ランデスキルヒェ）、――大陸的な――公布された憲法のみに係留している《形式的合理的な》法体系、位階制的な社会慣習をもち、工業化は国家により《上から》指導された（Weber 1968b: 1381–469/306–443; Mommsen 1974b: 83–86; Kalberg 1987を見よ）。ドイツとはきわめて異なった形態が、アメリカ合衆国でははっきりと見られる。非中央集権的で《弱い国家》、政治権力の分割、能動的な一般市民と自発的結社の偏在、平等主義的な社会パターン、教会と国家の分離、反権威主義的宗教制度、《下から》の工業化、そして（憲法に基づいているとはいえ）イギリス・コモンローの先例主義に由来する法システム（Weber 1988: 438–48; 1946c; 1968a: 1197–1210/717–26; 1985; Mommsen 1974b: 79–86, 92–95; Kalberg 1997を見よ）。最後に公務員の社

会的威信は、ドイツでは高く、鉄の檻モデルで中心的な役割を果たしているが、米国では異常なほどに低いと見られた。

> 官吏自身の社会的評価は――新規開拓地でしばしばそうであるように――社会階層がひどく不安定で、営利活動の大きな余地があるために、専門的な訓練を受けた行政への需要と身分的な因習の支配が共に格別に弱いところでは、特に低いことが常である。つまりアメリカ合衆国ではそうなのである（Weber 1968a: 960）。[8]

それ故に、もう一度いえば、ヴェーバーが現代を画一的な《鉄の檻》と見たという一般的な叙述は拒否されねばならない。彼の社会学上の論考がそれぞれの産業国家の政治文化はそれぞれ異なっていることを主張している。[9]《官僚制化》という点でさえ、ヴェーバーは事例特有のコンテクスト化を主張している。

> 官僚制化がどのような特殊な方向に発展したかは絶えず個々の歴史的事例を考察しなければならない。それ故に、あらゆるところで官僚制化の進展を見せている現代国家すら、国家組織内部で官僚制の権力が普遍的に例外なく増大しているかどうかはここでは未決のままにとどめなければならない。……。官僚制それ自体の権力が増大しているかどうかは、それゆえアプリオリには……決定できない」（Weber 1968a: 991）。[10]

そうすると、彼の比較史的論考では、ヴェーバーはどのようにアメリカ合衆国を描写したのだろうか。[11] 彼の分析は今日ですら、世紀末アメリカ社会の内的なメカニズム、特にその政治文化に対する有益な洞察を提供してくれるだろうか。

ヴェーバーのアメリカ合衆国政治文化論

ヴェーバーはアメリカの遺産に特有なものとして珍しいデュアリズムを見ていた。主導権（イニシアティブ）を発揮し、活動的で、起業家的な《現世支配》の個人主義は伝統によって抑えつけられることは比較的少なく、一見して反対のものと並立している。個人を利己的計算を超えて牽引し導き、共同体の改善へと向かわせる理想と価値という有名なシビック領域である。アメリカの形態をなしているシビック的構成要素と世界支配的な構成要素がともに、二〇世紀初頭にははっきりと弱体化していたことを彼は認めてはいたけれども、他の点ではかくも両立不可能な諸力の絡み合いがヴェーバーを魅了した。[12] 彼が探求から得た結論は、偶然どころではなく、この二つの――自己と共同体――への定位はアメリカの土壌、特にその宗教史に深く根をおろしているものである（Weber 1930: 155–183/ 163–206; 1946c; 1985; 1968a: 1204–11/721–26を見よ）。

現世支配個人主義と市民社会という理想の宗教的起源

アメリカの禁欲的プロテスタント諸宗派――カルビニスト、敬虔派、メソジスト、バプティスト、クウェーカー、メノナイト教会――は強烈で、職務に定位した個人主義を呼び起こした。これらの信徒はあらゆる被造物的衝動に対して《不寝番》を続けるようにとりわけ期待されていた。というのは世俗的な快楽という堕落への誘惑物を慎むことへの誓

いは並はずれていた。けれども、信徒の内的な自己自身の力量への全面的な信頼も期待された。《善悪》が厳密に道徳の観点で理解されたとしても、秘跡あるいは他の儀式は献身を補助することはできなかった。牧師さえも救済の保証を与えることはできなかった。怒った全能で復讐の神である旧約聖書の神の前に孤独に立たされ、孤独に責任を負い、献身のみが彼らが予定された身分であることを必ず《証明》できるとされ、それゆえ最も重大な問題に関する恐怖を克服することができた。すなわち「私は救われたものの一人だろうか」という問題である（Weber 1930: 104–105/94, 123/122; 1968a: 1198–1200/717–19）。

けれども禁欲という命法――被造物的衝動を訓化するために英雄的な規律により個人のエネルギーに焦点を当てること――は禁欲的プロテスタンティズムに課せられた要求の一つにすぎなかった。それに加えて、信徒には、神の国を地上に創出することで世俗の悪を《支配する》ことが期待された。悪を赦すことも悪を分離することも許されなかったので、世界支配という宗教義務は献身への命令となった。すなわち神の命令に従って、世俗の悪に反して行為せよ、必要とあらば世俗的権威と世論に反しても。この故に、これらの信者は妥協、忠告、黙想へと向かう個人主義を実践したことはなかった。その代わり、不屈の《世俗内》個人主義が陶冶され、初期のアメリカ人達に不屈の態度と伝統と対決する能力の点でたくましい楽観主義を与えた。全体としての社会の変革――神の国の建設――がその目標となっている（Weber 1930: 108–109/99–101, 223n. 27/96n.3; 1946c: 321/234–35; 1985: 10–11/392–94; 1968a: 1207–09/724–726）[13]。それ故、共同体の改善は禁欲的プロテスタント達にとって、宗教的義務眼目であり神への奉仕と見なされたのである。

このことは別の仕方でも同様に生じた。既に注記したように、献身は信者の中心問題――彼らの個人の救済状態――に関する不確実さに伴う、身も心も苛む不安を軽減することができる唯一のものであった。けれども、とりわけカルビニズムは彼らの行為によって自分自身が救われたものの一員であることを確信させることができた。ヴェーバーはこのように働く特殊なメカニズムを強調している。もし――物質的繁栄と定義された――世俗内での成功が達成されたなら

ば、信者は全知全能の神が恩寵を与えてくれたと結論することができる。そしてもちろん、この神はそのような《しるし》を予定されたもののみに与えたもう、と。著しく強力な《心理的報奨金》はこのようにして方法的な仕事への報酬となった。体系的な労働を通じてのみ物質的繁栄は達成されるのである（Weber 1930: 172/192; 1968a: 572–73/346–47, 1197–200/717–19, 1203–210/721–26）[14]。

注目すべきことに、個人の救済状態の確証の探求により究極的に動機づけられていても、この労働の強化はまさに信者の共同体への参与を強調する効果をもっていた。というのは、禁欲的プロテスタンティズムの教理により、救われたものの一員であるという会員権（メンバーシップ）の《証明》を一人で作り出すように放り出されていたとしても、職業への献身的な方法的労働は――そのようにすることによって――その個人にのみ奉仕するだけではなかった。それよりも、神の栄光は信者に神の代理として働き、神の名誉を祝して人間の地上における王国の栄光を創り出すことを要求した。それ故に、労働は方法的になり、けれども自己中心的な個人の利害関心から離れ、よりずっと広い任務に定位するようになったのである。この任務＝伝道は宗教的義務を構成した。このようにして、労働は信徒を共同体へと結合し、物質的財貨の蓄積を狙う功利主義的計算よりずっと広い目的のために行われた。ここにははっきりとした二元論が見て取れる。現世支配の個人主義は個人の権利と、彼らの個人的運命の形成と再形成を行う能力に焦点を当てていた。けれども共同体とその改善への参画への同様に強力な推進力も存在していた。

更に、禁欲的で《世俗》的プロテスタンティズムにより共同体への参画に課せられた心理的報償によって上述の組織は《社会的担い手》として結晶化する。信頼と援助の場としての家族はこの組織において存在するので、これは集団参加のための存続可能で自然な《訓練場》として役立った。ここで、信者同士の世俗的ミリューの中で、《自治のルール》と集団への奉仕の観念が学ばれた。シビック行動主義への推進力は、成果志向の個人主義への推進力でもあり、宗教的経験から結晶化し、アメリカ植民地の初期のアメリカ合衆国に幅広い痕跡を残した（Weber 1946c, 1985を見よ）。

仕事中心主義と経済的成功の宗教的重要性、そして神の命令に関する禁欲的で厳格な誓いにより、信頼、誠実な助言及びフェアプレイの倫理は商業上の関係にとってすら堅固な理想として構成された。この領域でひとたび確立されると、地域差によって様々な程度ではあるが、これらの理想は政治領域にも持ち込まれ、誠実さ、社会的信頼、善意、公共生活一般へのフェアプレイという強力な理想を作り出した。これらの理想は一九世紀半ばの工業化の開始ずっと以前に生じ、公的領域への強力に浸透していった。《公的倫理》のシビック的領域が生まれ、選出された公務員はこの高い理想を遵守することが求められた。[15]

ヴェーバーによれば、強力なシビック的理想は諸国民の政治文化にまれにしか現れなかった。それらを産業化に伴って現れるものとして、進化論的に理解することはできない（Parsons 1966, 1971; Kalberg 1993, 1997を見よ）。[16] その上、現世支配的個人主義と平行して現れることはきわめてまれであると彼は信じた。それどころか、禁欲的プロテスタンティズムの共通の基礎の上でシビック的諸価値は活動的個人主義と相互に絡み合っていた。それがより堅固で幅広くなると、シビック領域は個人主義を指導する権力をもつようになり、それを自己中心的な物質的繁栄のみの追求から引き離し、共同体規範の改善へ向かわせ、それに応じて禁欲主義も弱まっていった。シビック的理想もこの個人主義が単なる道具的で利害得失の自己中心的な計算にたやすく退廃していくのを妨げた。他方で、それが個人に《現世》で行為する力と自信を付与し、――必要ならば道徳的観点で――価値原理・権利といったものを擁護する力を与えたので、大きな障害に当たった場合も、植民地時代と初期アメリカ合衆国の活動的個人主義は、公共倫理を繰り返し刷新した。それどころか、この《現世に定位した》個人主義は、権威と権力に対立する個人の権利という自立した観念が社会学的に有意味な仕方で存在しうるならば、社会文化的な必然であるといえるかもしれない（Weber 1968a: 1204–11/721–26; 1988: 438–49）。[17] 逆に、倫理的価値のために共同体を改革――行為――するように個人に課せられたシビック的理想の高い要求により、現世支配の個人主義は永続的に活性化された。この相互に維持する力学は固定化した（Kalberg 1997:

209–16)。

比較の観点から見ると、きわめてユニークな二元論がこの政治文化を特徴づけていたとヴェーバーは見ていた。更に、鉄の檻という二分法――公共圏に技術的・行政的・市場的強制が浸透し、シビック的理想は存在せず、価値に縛られない粗野な権力と利害打算に支配される一方で、温かさと共感という親密な関係を陶冶する非政治的で私的な避難所という二分法――を粉々にする。逆に、植民地時代と初期のアメリカ合衆国では誠実さ、フェアプレイ、社会的信用、善意、平等な待遇――これは一つのエートスなのであるが――というシビック的理想は公的領域に浸透し、活動的個人主義を全くの利益追求、権謀術数、自己中心主義、日常生活での無限の誘惑の中での放縦といったものから引き離した。

もちろんヴェーバーは、一九世紀末と二〇世紀初頭のアメリカにおいて腐敗と《猟官制》が広く残っていたこと、権力と露骨な打算がしばしば公的倫理を圧倒したことを知っていた。それどころか、彼は公的なエートスに関する倫理的行動を例外と見なし、都市派閥の政治腐敗は著しく広まっていると見ていた（Weber 1946a: 108–10/538–40; 1968b: 1401/331; 1978: 281–82/63）。それにもかかわらず、アメリカ宗教史に深く根ざしたシビック的美徳は、遺産となってからさえも彼に重要な社会学的衝撃を与え続けた。鉄の檻モデルを特徴づけているのは全く異なった変数と二分法であった。それは官僚、国家の法律、閉鎖的な政党がシビック的領域のあらゆる理解を包囲し、独占さえしてしまう政治文化であった[18]。ユニークなアメリカの二元論――現世支配的個人主義と密接に絡み合った倫理的価値が浸透した拡大されたシビック的領域――により動く珍しい振り子運動は大部分、アメリカ政治文化の動的で落ち着かない特徴を説明するとヴェーバーは論じる。

ヴェーバーの分析の適用――今日のアメリカの政治文化

ヴェーバーはアメリカ政治文化の古典的二元論を適切に記したけれども、どのように弱体化していくかを彼ははっきりさせなかった。彼にとっては、大規模な官僚制化は結局、ヨーロッパでそうだったようにアメリカ合衆国の工業化にも付随していくように思われ、それ故、官僚の権力と威信の増大が生じると思われた。専門化された知識を所有し、大規模な組織において権力を集中的に所有する幹部官僚が政策決定の領域にも専有的に侵入し、開かれた政治的討論と政党間の闘争、公的領域の理想のわずかな遺産も消滅してしまうことをヴェーバーは懸念した。そうなれば公的理想の大規模な形骸化が進行し、高貴な理想、多元的で競合し合う価値、倫理的行動を欠いた閉鎖的で、頑なで、内向的な社会が生まれるだろう。リスクを回避し、臆病で小役人根性丸出しの官僚的な人間類型が支配的になるだろう（Weber: 1946a; 88/516–17; 1968a: 971/560; 1968b: 1398/327–328, 1400–405/329–36; 1978: 281–82/61–62; Mommsen 1974b: 86–89, 92; Roth 1985）。

近年のアメリカ合衆国の社会評論家は《シビックの喪失》と公的倫理の弱体化が生じたと嘆いた（Etzioni 1997, 1998; Bellah et al. 1985; Putnam 1995; Selznic 1994 を見よ）。しかし、この転換が生じたのはヴェーバーが明らかにしなかった理由による。ごく最近まで、アメリカ政治史は繰り返し――国家と政党の――官僚制化に対する大衆抗議運動の波により特徴づけられてきた。威信をもった幹部官僚のカースト化は結晶化しなかった。[19] その代わり、シビック的価値の弱体化は、むしろ消費文化が遍在するようになり、エンターテイメント文化がきわめて活況を呈するようになった結果によるものである。この両者はシビック的領域の理想に対立し、競合するきわめて魅力的な領域なのである。

アメリカの現世支配的個人主義は、自己中心的な物質的繁栄とシビック的価値の布置関係に支配されることはますます少なくなり、自己中心的な物質的繁栄と消費エンタメ文化にますます支配されるようになっていくように思われる。明らかなのは他のポスト工業国と比較できないほどの強烈さである。元々シビック領域と完全に絡まり合い、それによって鼓舞されていたので、活動的個人主義はこの主導的力からかなりの程度まで推進力を得ていたが、いまや社会科学の学位をもったマジソン通りの取締役に体系的に誘惑され、洗練の度を増している。シビック的理想は、今や消費者産業とエンタメ産業に浸透された《公共圏》の範囲にまで大幅に縮小された。この両者は、友愛、快適さ、興奮、ロマンスのイメージを提供し、個人の繁栄を願う。

この新しい政治文化は旧来のそれと異なっている点がもう一つある。かつての二元論には任務志向型個人主義が自己中心主義に陥るのを防ぐチェック機能を果たす強力なシビック的内容が含まれていたのに対し、新しい二元論は自己中心性に対する全く異なった障壁をもっている。共同体の改善と市民的共同体への貢献は、神のより大きな栄光のための悪の克服をのぞけば、今や活動的個人主義の牽引力としては骨抜きにされている。むしろ《ファッショナブルなもの》、《流行のもの》、《トレンディ》なものに適応しようとする微妙であからさまな圧力がそれを行っている。かつての個人主義とシビックの二元論が互いに支え合うダイナミズムを呼び起こし、それは社会横断的に個人主義とシビック的要素の両方を鼓舞したのに対し、個人主義／消費エンタメの二元論は異なったアゲンダを追求する。結局は個人が物質的繁栄のみに定位することへの障害を引き起こすというよりもむしろ、消費エンタメ文化はこの定位と緊密に協力し合っている。すぐには明らかでなくとも、長期的な帰結は明らかだろう。個人主義は弱体化し、シビック的領域と社会のダイナミズムと開放性はより大きな社会的画一主義に向かう。

ヴェーバーはこの変貌を曖昧にしか予見しなかったけれども（Weber 1930: 181–82/203–204）、このパラドキシカルな転換に彼は全く驚かなかっただろう。それは超越的な戒律と宗教的価値への定位――独立独歩と現世支配的個人主義

――から生じたある単一の要素が後の歴史的時代にはその不可避な反対物へと転化する過程である。即ち、実体を伴い、他の領域からはっきり区別されるシビック的領域である。このような皮肉なねじれ現象を彼は発見していたし、東西の歴史を通したこの秩序の歴史的重要性の見えざる帰結を発見していた。[20] このねじれ現象と見えざる帰結は彼の比較歴史社会学というまさに基礎の上にあるのである。

それにもかかわらず、この新しいアメリカ政治文化の叙述は、シビック的理想がほぼ消滅することを前提にしているが、ヴェーバーの経験的社会学の中心にあるもう一つの基礎公理と対立する。それはこの巨大な過程にまた別の光を投げかける。彼は再三再四、また強調して、有意義な発展は、ひとたび堅固に社会学的に係留されれば、国民の社会的風景から急激に消えてなくなることはないし、短期的挑戦の結果として消滅することがないのは確実であると論じたのである。[21] 過去にしっかりと根付いた遺産は生き続けることができる。とりわけもし過去に根付いた活動に定位する《社会的担い手》として役立つ新しい集団形成と組織化を呼び起こす社会変動が生じたならば。[22] 長期の休止状態にもかかわらず、遺産は生き続け、変化した文脈においてより強力な影響力を再びふるうことを待っている。過去と現在はヴェーバーにとって、緊密に絡み合っているのである。[23]

ヴェーバー社会学のこの主要教義を認識すれば、上述の分析の再考が強いられる。個人主義／消費者エンタメという二元論は新しいアメリカの政治文化を不完全にしかとらえられないことが認められねばならない。むしろ現世支配的個人主義、消費者エンタメ産業、並びにシビック的領域の理想という三頭の力が今や広まっている。脅かされているとはいえ、この理想は、長期的で宗教に基づいた行動パターンに深く根ざしたおかげで生き続けている。[24] 時々、現代の変動が段階的に生じる中で、この三つの領域は境界を維持し続け、様々な程度に互いに対抗し合うし、様々な程度に他と絡み合い浸透し合っている。時にはこれらの領域は絶え間なく競合し合い、時には強固に協力し合う。また時には、一つの領域が他の領域に対して、支配的になる。[25]

それ故、今や三局的布置関係がアメリカ政治文化の振り子運動を規定し、動かしている。古い二元論から断絶しているとはいえ、この新たな形態もユニークで、他のいかなるポスト産業諸国のそれとも異なるものである。それは鉄の檻モデルとは強烈な対照をなし続けている。ほぼ百年たっても、マックス・ヴェーバーの社会学の根本的な位相がその内容と変数、緊張関係と内的ダイナミズムを判明するのに役立った。[26]

原注

(1) Weber, *The Protestant Ethic* (Los Angeles: Roxbury, 2002), p.123 (強調は原文). ヴェーバーの議論のこの段階については他のところでより詳細に論じた。Stephen Kalberg, "Introduction to the Protestant Ethic" (Los Angeles: Roxbury, 2002), pp. xxvii–xlviii. を見よ。

(2) このフレーズがパーソンズによる《鋼鉄の檻 stahlhartes Gehäuse》の貧弱な翻訳を構成しているにもかかわらず、その高度に視覚的(ビジュアル)な表現のため今日まで用いられている。"Steel-hard casting" がより精密な翻訳である。Weber, *Protestant Ethic*, pp.245–46, n. 129 を見よ。

(3) Weber, *Protestant Ethic*, pp.123–24. 以下、ヴェーバーのテキストの参照頁は、最初に英語訳のページ数を挙げ、次にドイツ語版のページ数を記した。ドイツ語版に関する情報は文献リストを参照［訳注—原文では本文中に英語訳が引用され、脚注で対応箇所のドイツ語版が引用されていたが、煩雑さを避けるために訳稿では原文引用は省略した］。

(4) Weber 1968b［1971］: 332.

(5) Weber 1968b［1971］: 333.

(6) Weber 1968b [1971] : 64.
(7) Weber 1968a [1976] : 15.
(8) Weber 1968a [1976] : 553.
(9) 例えば、Weber 1930; 1946c; 1985; 1968a: 889–92/509–11, 1059–69/ 616–24, 1204–10/721–26; 1968b: 1400/329–30, 1381–469/306–406; 1978; 1994を見よ。1946a: 87–114 の概括的議論も見よ。
(10) Weber 1968a [1976] : 572.
(11) アメリカ合衆国については、更にWeber 1930; 1946c; 1968a: 1198–210; 1985 を見よ。Mommsen 1974b; Roth 1985, 1987/717–20; Scaff 1998 も見よ。
(12) ロート（1985; 1987: 165–200; 1997）とモムゼン（1974b）は、ヴェーバーの肯定的な米国観が彼のドイツ人の同僚たちのそれとはかなりの程度異なっていることについて要約的記述を提供している。特に彼はアメリカ人の独立独歩の個人主義と国家に誇張的な権威を認めたがらない点で賞賛した。この二つの点ともドイツ人には欠けていると彼は見たのである（Mommsen 1974b: 83–86; Roth 1993; 1997: 665–70 を見よ）。
(13) 全く世俗化していても――今日でもなおこの一組の価値と一部には伝道的な意識への係留されたアメリカ外交政策との選択的親和性についてはKalberg 1991 を見よ。
(14) ヴェーバーの極度に複雑な分析の一部の局面のみがここで述べることができる。Kalberg 1996: 57–61; 2000a を見よ。
(15) そのようなシビック的領域が十分に展開したところではどこでも、選出された公務員によるその価値への侵害は特に言及されるだろう。（ウォーターゲートやモニカゲートのような）著しい場合には、国民は激しく反応するであろう。最後の数パラグラフの拡張版についてはKalberg 1997: 212–16 を見よ。
(16) それ故、ここでとられている立場はヴェーバーの「プロ倫」における議論と全く類似的である。《経済倫理》（資本主義の精神）の起源は《経済形式》（近代資本主義）の点からは説明され得ないのである。Weber 1930; 64–67/49–52, 75–78/ 60–62 を見よ。いずれの場合も特別な社会的文脈に注意が払われねばならない。
(17) それ故、ヴェーバーはアメリカ政治文化のこの局面は特別な宗教的根源をもっていると見ており、それらすべてはドイツには欠けていると見ていた。この主題に関する彼の初期の関心をイェリネックの著作は刺激した。Jellinek 1901; Roth 1971;

Mommsen 1974b: 76 を見よ。

(18) ドイツの場合のように（Weber 1946a: 103/533, 111–14/541–45; 1968b; 1994）。

(19) ロートもモムゼンも、ヴェーバーの予言――米国もヨーロッパのたどった巨大な官僚制化への道をたどるだろう――は誤りであったと論じた。ロートは分析を拡張している（Roth 1985: 224–28; 1987: 15–57; Mommsen 1974b: 89）。ドイツの新聞で過去二〇年間続いた議論は、ドイツにおける《企業家精神》の消滅であり、そのような議論はアメリカの新聞にはなかったが、このテーマの経験的な探求に適切な出発点を与えるであろう。

(20) 「プロ倫」の最も著名な例は、宗教的価値に係留され、カルビニズムの《方法的生活態度》は富を作り出したが、それが最後にはまさに宗教的価値の基礎を掘り崩してしまうというものである。ヴェーバーが予期せざる帰結を証明するやり方の一つは、《カリスマの日常化》に関するものであり、これは彼の比較論考を通じて繰り返し見られるものである。

(21) 禁欲的プロテスタンティズムから生じた上述の価値のリストを見よ。それは今日のアメリカ社会ですら顕著なまま残存している。Kalberg 1997 も見よ。

(22) 担い手の組織としての教会とセクト《プロテスタンティズムの倫理》から身分層としての市民的で自発的な結社《資本主義の精神》へのシフトの成功はヴェーバーの《プロテスタンティズムの倫理テーゼ》の中心的な構成要素の一つである（Kalberg 1996: 62–64）。社会的担い手層についてはKalberg 1994: 58–62 を見よ。

(23) ヴェーバー社会学でこれが生じている仕方については繰り返し論じた。Kalberg 1994: 158–68, 187–89; 1997: 212–16; 1998: 232–35; 1999: 233–36.

(24) それどころか古典的なアメリカの二元論は、このより宗教に定位した国民宗教において（例えば中西部）、明らかに今日に至るまで維持されている。

(25) シビック的理想の持続の証拠はいろいろある。例えば、アメリカ人がボランティアとチャリティ活動に比較的参加する度合いが高いことから、コミュニタリアリズムの継続する議論まで（Etzioni 1997, 1998 を見よ）。更なる証拠は政治家による、アメリカの外交政策にシビック的理想の生存力を主張しようとする継続する試み、そしてそれ故、それらに普遍的妥当性を付与しようとする試みに見られうる（Kalberg 1991）。

(26) クローディア・ヴィース＝コールバーグの有益な助言に感謝したい。

参考文献

Kalberg, Stephen. 1987. "The Origins and Expansion of *Kulturpessimismus*: the Relationship Between Public and Private Spheres in Early Twentieth Century Germany." *Sociological Theory* 5 (Fall, 1987): 150–64.

——. 1991. "The Hidden Link Between Internal Political Culture and Cross-National Perceptions: Divergent Images of the Soviet Union in the United States and the FR of Germany." *Theory, Culture and Society* 8: 31–56.

——. 1993. "Cultural Foundations of Modern Citizenship." Pp. 91–114 in Bryan S. Turner, ed., *Citizenship and Social Theory*. London: Sage Publications.

——. 1994. *Max Weber's Comparative-Historical Sociology*. Chicago: University of Chicago Press.

——. 1996. "On the Neglect of Weber's *Protestant Ethic* as a Theoretical Treatise: Demarcating the Parameters of Post-War American Sociological Theory." *Sociological Theory* 14: 49–70.

——. 1997. "Tocqueville and Weber on the Sociological Origins of Citizenship: The Political Culture of American Democracy." *Citizenship Studies* 1: 199–222.

——. 1998. "Geschichte und Gegenwart im Werk Max Webers" (Past and Present in Max Weber's Works). Pp. 76–115 Frank Welz and Uwe Weisenbacher, eds., *Soziologie und Geschichte: Die Bedeutung der Geschichte für die soziologische Theorie*. Düsseldorf: Westdeutscher Verlag.

——. 1999. "Americanization, Converging and Diverging Societal Developments, 1968–1990." Forthcoming in Detlef Junker, ed., *Germany and the US in the Era of the Cold War, 1945–1990*. Cambridge: Cambridge University Press.

Weber, Max. 1930. *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*. Translated by Talcott Parsons. New York: Scribner's. Originally:

(1920) 1972. Pp. 1–206 in *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie* (*GARS*), vol. 1. Tübingen: Mohr.

——. 1946a. "Politics as a Vocation." Pp. 77–128 in *From Max Weber* (*FMW*), translated and edited by H.H. Gerth and C. Wright Mills. New York: Oxford. Originally: (1920) 1968. Pp. 505–60 in *Gesammelte Politische Schriften* (*GPS*). Tübingen: Mohr.

——. 1946b. "The Protestant Sects and the Spirit of Capitalism." Pp. 302–22 in *FMW*. Originally: (1920) 1972. Pp. 207–36 in *GARS*, vol. 1.

——. 1968. "Parliament and Government in a Reconstructed Germany." Pp. 1381–1469 in *Economy and Society*, edited by Guenther Roth and Claus Wittich. New York: Bedminster Press. Originally: (1920) 1968. Pp. 306–443 in *GPS*. Tübingen: Mohr.

——. 1978. "The Prospects for Democracy in Tsarist Russia." Pp. 269–84 in *Weber: Selections in Translation*, edited by W.G. Runciman. Cambridge: Cambridge University Press. Originally: (1920) 1968. Pp. 33–68 in *GPS*. Tübingen: Mohr.

——. 1985. "'Churches' and 'Sects' in North America: An Ecclesiastical Socio-Political Sketch." *Sociological Theory* 3: 7–13. Originally: 1906. Pp. 558–61, 577–81, in *Christliche Welt*.